

【資 料】

避難所疑似体験演習の教育的効果の一考察

— 救援コース履修者と一般学生の比較 —

百 田 武 司*, 中 信 利恵子*

【目的】 必修科目「災害看護学」の一環として、地震により津波警報が発令され、大学の体育館に避難所が開設されたことを想定した一泊二日の「避難所の疑似体験演習」を実施した。そして、救援コース履修者と一般学生の、本演習による避難所の理解や本演習プログラムの意義等のとらえ方の違いについて比較、検討し、本演習の教育的効果を検討した。

【方法】 参加者に、5段階評定の質問紙調査を実施し、救援コース履修者と一般学生を比較した。

【結果】 「避難所で看護職が行う役割」についての理解の項目において、救援コース履修者の方が一般学生よりも理解の度合いが高い傾向が認められたが、すべての項目については、両群に統計的に有意な差はなかった。

【考察】 本演習の教育的効果については、一般学生であっても、演習前に、本演習についてのレディネスとモチベーションを高めることによって、救援コース履修者と同様の学習効果が得られると考えた。

【キーワード】 避難所、演習、救援コース

I はじめに

日本赤十字広島看護大学（以下、本学）では、文部科学省の平成21～23年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラムに、「もっと世界とクロスする救援ナースの育成」が選定された。このプログラムは、国際救援・開発協力看護師育成のための基礎コース（国際救援・開発協力看護師コース、以下、救援コース）として体系的な教育課程を編成し実施するものである。これは、入学後に、本コースを希望する学生から選抜し、体系的に救援看護師としての基礎能力の開発を強化したプログラムを編成し、語学教育や国際救援活動の基盤となる専門教育を行い、大学と赤十字関連施設との連携により行うことで、大学教育と国際医療救援拠点病院における卒後教育に連続性を持たせ、これらにより、海外で災害救援や開発協力で活躍できる資質を備えた看護師を育成しようとするものである（日本赤十字広島看護大学、2011）。

筆者らは、従来、学部4年生・編入4年生必修科目である「災害看護学」を担当しており、平成22年度よりこのプログラムの具体的取り組みとして、「避難所疑似体験演習」（以下、本演習）を「災害看護学」の一貫として実施している（百田、中信、2011）。

そして、平成23年度は本演習の対象者を、救援コース履修者全員とそれ以外の学生のうち希望者（以下、一般学生）として実施した。

そこで、本稿では、平成23年度の本演習の実施状況を紹介し、演習終了後に実施した本演習参加者への質問紙調査の結果から、救援コース履修者と一般学生の、本演習による避難所の理解や本演習プログラムの意義等のとらえ方の違いについて比較、検討し、本演習の教育的効果を検討することを目的とした。

II 本演習実施の状況

平成22年度の本演習状況については、既に報告しているため（百田他、2011）、本稿では平成23年度の本演習における変更点を中心に述べる。

1. 本演習の演習実施日時

本演習は、2011年10月28日11:00～29日12:30に、本学体育館で実施した。

2. 本演習の参加者

参加者は、学部4年生の「災害看護学」受講者のうち、救援コース履修者全員（該当者16名、うち1

* 日本赤十字広島看護大学 hyakuta@jrchn.ac.jp

名欠席)と、希望した一般学生30名(当初希望31名、うち1名欠席)の、計45名であった。参加者にとって本演習を実施した時期は「災害看護学」の授業のうち、災害看護学の概略と災害サイクルにおける急性期と亜急性期の講義、及び災害トリアージ演習を終えた段階であった。

3. 本演習の実施内容

平成23年度の本演習は、東日本大震災が発生したこともあり、地震に加えて津波被害を想定したものとした。設定する内容は、本学のある広島県廿日市市で、震度5弱の地震が発生し、津波警報が発令され、さらに同規模の余震が発生する恐れがあり、本学の体育館に避難所が開設されたこととした。そして、一泊二日の避難所の疑似体験演習を実施した。

1) 災害情報

災害の状況は以下のように設定した。

2011年10月28日(金)14時頃に地震発生。かなりの恐怖を感じるくらいの激しい揺れ。体感、周囲の状況から震度5弱ぐらいと思われる。当日天候は晴れ、気温22℃。NHKのニュース速報では、次のように報道された。以下、概略を示す。

「本日14時頃、最大震度7の激しい揺れを測定する地震がありました。震源地は和歌山県潮岬南南西沖約80kmで、震源の深さは約25km、地震の規模(マグニチュード)は8.0と推測されます。震度、廿日市市：5弱。この地震で気象庁は、14時5分、和歌山県と三重県に大津波警報、大阪府、兵庫県、愛知県、静岡県、神奈川県、徳島県、香川県、高知県、愛媛県、岡山県、広島県、の沿岸に津波警報、その他の太平洋沿岸、瀬戸内海沿岸に津波注意報を発令しました。到達予測時刻、広島県：16時30分、予想される津波の高さ、広島県：3mと発表されています。」

2) 参加者の場面設定

演習参加者は以下のように場面設定した。

あなた(演習参加者)は、廿日市市の海岸沿いにあるアパート(木造二階建て)の一階に住んでいます。地震発生時はひとりで在宅中です。あなたは、けがをしていません。ただ、津波警報が発令されているため、一刻も早く、安全な高いところに避難しなければなりません。そのため、高台にある在学する本学に避難することに決めました。また、家族の安否が不明です。電話(固定電話及び携帯電話)がつながりにくく、家族全員と連絡が取れません。同規模の余震が発生する恐れもあり、自宅の耐震性が十分でないため、余震がおさまるまで、近くの本学の体育館に開設された避難所で生活することになり

ます。避難所には地区住民約50名が避難してきています。幸い負傷者はいません。体育館内は特に散乱した様子はありませんが、窓ガラスに一部ひび割れがあり、危険箇所が数カ所あります。体育館自体は、損傷は見当たらないと報告されています。体育館は停電し、シャワー用のガスも使えません。水道は特に問題なく、使用可能です。ただし、トイレの配管の一部に損傷があり、トイレの使用は1カ所のみに制限されています。一方、道路には大きな損傷はありません。また、高台にある周辺の店舗は、耐震性が十分な店舗については営業しており、食材等の調達はなんとか可能です。避難所の運営は地域の役員が中心になって行います。また、避難住民の中に、元看護師、介護ヘルパー経験者と、赤十字救急法受講経験者がおり、元看護師を中心に避難住民の健康管理のために「健康管理班」として活動します。避難住民は、地域の役員を中心に、以下の役割分担をして避難生活を送ることとなりました。①避難所運営班(全体リーダー含む)、②避難所設営・生活環境班、③食事班、④健康管理班。

これらの班の配置は、予め決めておき、参加者が事前に準備して演習に参加するように指導した。なお、上記班は、演習の展開により、臨機応変に学生の全体リーダーが中心となり、学生が主体的に修正変更していくこととした。

平成23年度の本演習のプログラムのスケジュールについては、表1に示した。

3) 演習前オリエンテーション

演習に先立ち、6月下旬に本演習対象となる、「災害看護学」履修予定の学生全員に、本演習の内容を説明し、参加希望者を募った。さらに、8月上旬に、本演習参加予定者に、演習で想定する災害の状況を示し、担当する班を決め、班ごとに演習前の事前学習課題を提示し、演習の冒頭でプレゼンテーションすることとし、教員は学生に準備を促した。

4) 1日目のプログラム内容

(1) オリエンテーション、災害意識の導入

演習前に、参加者に災害意識を導入することは、参加者の危機意識・臨場感を高めるために重要とされる(北村, 2010, 名古屋市消防局, 2001)。一方、平成22年度の本演習の課題として、演習における避難所のリアリティー不足があった(百田他, 2011)。そこで、オリエンテーションでは、担当教員が本演習の災害想定状況を、プレゼンテーションソフトを用いて、ニュース速報の効果音を入れ、臨場感を高め、災害のリアリティーを高めるように工夫した。

表1 平成23年度避難所疑似体験演習スケジュール

1日目(10月28日)

時間	内 容
11:00-12:00	演習準備(演習前準備担当者のみ)
13:00	講義室 集合
13:00-14:30	オリエンテーション, 災害意識の導入, 事前学習発表
14:30-15:30	各自が持ち寄った非常持ち出し品を披露し検討 避難所机上シミュレーションと設営体験
15:30-18:30	夕食検討, 買い出し, 炊き出し, 健康チェック
18:30-19:30	夕食
19:30-20:30	夕食後片付け
20:30-21:00	1日目まとめ
22:00-	就寝

2日目(10月29日)

時間	内 容
4:30	予告なしの避難指示(大津波発生の可能性)
6:00	起床
6:30-6:40	ラジオ体操
6:40-7:30	朝食炊き出し
7:30-8:00	朝食
8:00-9:00	朝食片付け
9:00-10:30	災害時要援護者の受け入れ検討
10:30-11:30	総まとめ
11:30-12:30	避難所片付け
12:30	解散

(2) 事前学習の発表

平成23年度の本演習では、学生が班ごとに、上述の事前課題をまとめ、プレゼンテーションした。

(3) 非常持ち出し品の検討

(4) 避難所立ち上げ図上シミュレーションと設営

(5) 夕食検討, 買い出し, 調理, 夕食, 後片付け

食事班が中心となり、参加者の食品アレルギーの有無等を確認し、夕食のメニューと必要な食材、それに調理器具等も検討し、近隣の店舗で購入し調理した。なお、購入に際し、最終許可を学生の全体リーダーと教員に求めることとし、その連絡手段として無線を使用した。

(6) 1日目のまとめ

(7) 就寝

平成23年度の本演習は、停電している想定での演習としたため、体育館の電灯を原則つけず、持参の懐中電灯などの明かりのみで一晩過ごした。

5) 2日目のプログラム内容

(1) 予告なしの避難指示

参加者に事前に知らせない状態で、突然、早朝の4:30に大きな余震がおこり、それによる大津波がおよそ15分後に到達する可能性があるため、体育館の上階に緊急に避難するように、教員から無線で参加者に指示した。結果的に、参加者は13分後に全員避難を完了した。

(2) 朝食準備, 朝食, 後片付け

(3) 災害時要援護者の受け入れ検討

平成23年度の本演習では、避難所に災害時要援護者を受け入れる状況について、学生が主体的にシナリオを作成し、要援護者(高齢者、車椅子使用者、妊婦、乳児を連れた者、傷病者、それに日本語の不自由の外国人等)の役を決めてシミュレーションし、課題等を検討した。

(4) 総まとめ

6) 保健・衛生について

健康管理班が中心となり、1日目に参加者リストを作成し、定期的に体調管理のための健康チェック(血圧・体温測定)、既往歴・現病歴等の確認や健康相談等を実施した。また、平成23年度の本演習では、学生の発案で、避難所生活でリスクが高まる廃用症候群(生活不活発病)や下肢深部静脈血栓症等の予防のために(土肥, 2011; 楽木, 2011)、2日目の早朝に屋外でラジオ体操を実施した。

Ⅲ 本演習実施後の参加者への質問紙調査

1. 調査目的

本演習終了後の、本演習による避難所の理解や本演習プログラムの意義等のとらえ方について、救護コース履修者と一般学生との違いについて比較、検討し、教育的効果を検討することを目的とした。

2. 対象者

本演習参加者の学生45名であった。

3. 調査方法

筆者らが独自に作成した無記名の質問紙を対象者に配布し、本演習のプログラム終了後に個別に回収した。調査日は2011年10月29日であった。

1) 調査内容

質問紙の主な内容は、避難所についての理解、本演習プログラムが有意義であったか、本演習参加後の災害看護への興味、災害看護活動へ意欲等で構成した。

2) 分析方法

調査内容ごとに記述統計を算出した。救援コース履修者と一般学生の比較を、基本属性は χ^2 検定、それ以外の項目は5段階で評定（“全くない”0点、“あまりない”1点、“どちらでもない”2点、“ややある”3点、“大変ある”4点）を決め、Mann-Whitney U検定を行った。なお、解析にはIBM SPSS Statistics Ver.19を使用した。

3) 倫理的配慮

調査の実施に際しては、質問紙に調査の目的、意

義、及び無記名調査であるため、回答者個人が特定されないこと、得られた情報を外部に漏洩しないこと、成績評価等とは一切関係ないこと、得られたデータはこの調査目的以外では使用しないこと、調査への参加は自由であること、調査結果について、個人情報を守秘した上で、学会や学術誌等で公表すること等を明記し、筆者らが口頭でも説明を行った。また、質問紙の冒頭に、本調査の趣旨に賛同し調査に同意することの確認のチェック欄を設け、質問紙の提出をもって、調査への同意の確認とした。なお、日本赤十字広島看護大学研究倫理委員会の承認（No.1106）を得た。

4. 結 果

1) 対象者の質問紙回収状況と基本属性

本調査の対象者である本演習の参加者は、救援コース履修者15名、一般学生30名で、質問紙の回収率及び有効回収率は100%であった。性別は女性が多かったが、救援コース履修者と一般学生との間に、統計的に有意な差はなかった（表2）。

2) 本演習による避難所の理解や本演習プログラムの意義等のとらえ方

表2 対象者の基本属性

基本属性	救援コース履修者 (n=15)	一般学生 (n=30)	p値
性(男/女)	3/12	3/27	0.38

χ^2 検定

表3 対象者の本演習による避難所の理解、本演習プログラムの意義等のとらえ方

	救援コース履修者 (n=15) 平均値±SD	一般学生 (n=30) 平均値±SD	p値
理解できたか			
避難所のスペースや全体の配置	3.27±0.59	3.07±0.58	0.28
避難者に必要な食事や栄養、衛生面	3.13±0.64	3.03±0.56	0.57
避難所の環境	3.47±0.52	3.13±0.86	0.26
避難所における災害時要援護者に必要な支援	3.07±0.59	2.97±0.61	0.67
災害時の避難の際に必要な個人の装備や、避難所に必要な装備	3.07±0.59	3.07±0.45	0.97
災害時の避難所生活の課題	3.27±0.46	3.03±0.56	0.17
避難所で看護職が行う役割	3.20±0.41	2.90±0.61	0.09 †
有意義だったか			
オリエンテーション、災害意識の導入	3.13±0.35	3.17±0.65	0.60
事前学習の発表	2.87±0.52	3.07±0.83	0.21
各自が持ち寄った非常持ち出し品を披露・検討	3.00±0.65	3.07±0.78	0.66
避難所机上シミュレーションと設営体験	3.07±0.70	3.20±0.96	0.32
夕食検討、買い出し、炊き出し、夕食、夕食後片付け	3.20±0.56	3.10±0.88	0.94
1日目まとめ	3.33±0.72	3.20±0.76	0.59
就寝、夜間睡眠中	2.07±1.22	2.57±1.10	0.16
朝食炊き出し、朝食、朝食片付け	2.93±0.96	3.03±0.93	0.69
災害時要援護者の受け入れ検討	3.47±0.52	3.23±0.86	0.53
2日目最終まとめ	3.33±0.62	3.17±0.70	0.46
2日間の演習全体	3.47±0.64	3.33±0.66	0.70
災害看護に対する興味が深まったか	3.53±0.52	3.47±0.51	0.68
災害看護活動に参加する意欲が高まったか	3.47±0.64	3.33±0.66	0.51
今後もこのような演習があれば参加したいか	3.27±0.70	3.07±0.91	0.57

1) Mann-Whitney U検定。参考値として平均値±標準偏差を示した。

2) 質問は、“全くない”0点、“あまりない”1点、“どちらでもない”2点、“ややある”3点、“大変ある”4点とした。

† p<0.1

表3に、救援コース履修者と一般学生のそれぞれの質問の結果について、平均値±標準偏差を算出し参考値として示した。

(1) 本演習による避難所の理解について

本演習による避難所の理解について、①「避難所のスペースや配置」、②「避難者に必要な食事や栄養、衛生面」、③「避難所の環境」、④「避難所における災害時要援護者に必要な支援」、⑤「災害時の避難の際に必要な個人の装備や、避難所に必要な装備」、⑥「災害時の避難所生活の課題」、⑦「避難所で看護職が行う役割」を比較したところ、「避難所で看護職が行う役割」において、救援コース履修者の方が一般学生よりも高い傾向 ($p=0.09$) が認められた。しかしながら、この項目を含め、その他の項目には、統計的に有意な差はなかった。

(2) 本演習が有意義であったかについて

本演習が有意義であったかどうかについて、各プログラム別に①「オリエンテーション、災害意識の導入」、②「事前学習の発表」、③「各自が持ち寄った非常持ち出し品を披露・検討」、④「避難所机上シミュレーションと設営体験」、⑤「夕食検討、買い出し、炊き出し、夕食、夕食後片付け」、⑥「1日目のまとめ」、⑦「就寝、夜間睡眠中」、⑧「朝食炊き出し、朝食、朝食片付け」、⑨「災害時要援護者の受け入れ検討」、⑩「2日目最終まとめ」、⑪「2日間の演習全体」を比較したところ、救援コース履修者と一般学生との間に、すべての項目において統計的に有意な差はなかった。

(3) 本演習参加後の災害看護への興味・意欲等について

本演習参加後の災害看護への興味・意欲等について、①「災害看護に対する興味が深まったか」、②「災害看護活動に参加する意欲が高まったか」、③「今後もこのような演習があれば参加したいか」を比較したところ、救援コース履修者と一般学生との間に、すべての項目において統計的に有意な差はなかった。

IV 考 察

1. 救援コース履修者と一般学生の比較による本演習の教育的効果への影響

本演習実施後の質問紙調査の結果を、避難所の理解、本演習が有意義であったか、それに災害看護への興味や意欲について、救援コース履修者と一般学生で比較した。その結果、「避難所で看護職が行う役割」についての理解の項目において、救援コース履修者の方が一般学生よりも理解の度合いが高い傾

向が認められた。これは、対象学生のレディネスの違いによるものではないかと考える。本学の救援コースの教育目標は、①異文化コミュニケーション能力の強化、②赤十字の救援看護師の役割能力の充実、③災害時における問題解決能力や状況判断能力、ヒューマン・ケアリングを実践する人間性、④国際救援時における看護実践能力、などを強化することとしている。そのために、救援コース履修者は本演習参加までに、一般学生と同じカリキュラムに加えて、国際救援関連機関の実地視察や国際医療救援拠点病院で行う演習・実習などの科目を履修している。本学の救援コースにおいて、科目別に卒業時の達成目標が設定されており、本演習参加者の救援コース履修者が既に履修した科目の中で、「総合看護実習」、「国際看護学」、それに「国際看護学演習(アメリカ)」において、『専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する』ことが示されている。さらに、「看護英語」と「国際看護学演習(アメリカ)」において、『対象により良い看護を提供するために創造的に工夫することが出来る』ことが示されている(日本赤十字広島看護大学, 2011)。加えて、本演習の科目「災害看護学」では、本演習に先立ち、災害トリアージ演習を実施していた。災害トリアージ演習において、救援コース履修者は、一般学生に比べて多くの演習時間を履修していた。具体的には、救援コース履修者は、全員、災害トリアージ演習においては、被災者役とした。そのため教員は、救援コース履修者のみに、災害トリアージ演習に先立ち、被災者の理解を深め演技をするための指導を実施した。また災害トリアージ演習は、一般学生を2つに分けて実施した。そのため、災害トリアージ演習には、一般学生は1回の参加のところ、被災者役の救援コース履修者は、2回演習に参加し、演習の後まとめの解説にも2回参加していた。これらによって、救援コース履修者の本演習に関するレディネスが、一般学生よりも高かったと推測され、このことが「避難所で看護職が行う役割」についての理解の差の傾向に影響したのではないかと考える。

しかしながら、この項目を含め、その他のすべての項目については、統計的に有意な差はなかった。これは、一般学生においても、本演習に関するレディネスがあったからではないかと考える。なぜならば、本演習では、事前に本演習参加予定者に、演習で想定する災害の状況を示し、その上で班ごとに演習前の事前学習課題を提示し、演習の冒頭でプレゼンテーションするように指示していた。この事前学

習課題は、本実習前に発生した、東日本大震災の避難所における様々な問題についてであった。そのため、避難所についての事前知識がある状態で本演習に参加していたことが影響したのではないかと考える。さらに、本演習は、救援コース履修者は参加が義務づけられているが、一般学生は自ら希望した者であった。特に平成23年度の演習の実施時期が、未曾有の災害である東日本大震災が発生した後であり、参加者の本演習へのモチベーションも高かったと考えられる。

2. 今後の避難所疑似体験演習のあり方

以上より、本演習の教育的効果については、一般学生であっても、演習前に、本演習についてのレディネスとモチベーションを高めることによって、救援コース履修者と同様の学習効果が得られると考える。従って、今後の避難所疑似体験演習は、救援コース履修者に限らず、一般学生も積極的に参加できる体制を整備する必要がある。そのためには、演習前にオリエンテーションを十分に行い、事前学習課題を与える等、演習に必要なレディネスと、演習へのモチベーションを高めることが有効と考える。

3. 本調査の限界と課題

本調査は、すべての項目が、参加者の主観的な意見である。本演習の教育的効果を検討するには、客観的に本演習参加者を評価することも必要である。そのために、本演習の教育的効果を評価する具体的方法について検討することが課題である。また、本調査では、参加者の基本属性については、性別以外調査しなかった。本稿では、救援コース履修者と一般学生の2群間において、本演習による避難所の理解や本演習プログラムの意義等のとらえ方の違いについて比較、検討したものである。しかしながら、両群の参加者の中でも、災害看護や避難所支援などに対する認識や、災害看護活動経験の有無など、参加者のレディネスの違いがある可能性がある。そのために、参加者の背景や基本属性についてより詳細に調査、検討することが課題である。

V 結 語

必修科目「災害看護学」の一環として、地震により津波警報が発令され、大学の体育館に避難所が開設されたことを想定した一泊二日の「避難所の疑似体験演習」を実施した。そして、演習終了後に本演

習参加者に、質問紙調査を実施し、救援コース履修者と一般学生の、本演習による避難所の理解や本演習プログラムの意義等のとらえ方の違いについて比較、検討し、本演習の教育的効果を検討した。その結果、以下の知見を得た。

「避難所で看護職が行う役割」についての理解の項目において、救援コース履修者の方が一般学生よりも理解の度合いが高い傾向が認められた。これは、参加学生のレディネスの違いによるものと考えた。しかしながら、この項目を含めその他のすべての項目については、両群に統計的に有意な差はなかった。従って、本演習の教育的効果については、一般学生であっても、演習前に、本演習についてのレディネスとモチベーションを高めることによって、救援コース履修者と同様の学習効果が得られると考えた。

謝 辞

「避難所疑似体験演習」に対し、貴重なご意見を提供くださった演習参加者の皆様、また、本演習実施に際してご協力いただいた本学教職員の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本演習の実施に際して必要な経費は、文部科学省の平成21～23年度「大学教育・学生支援推進事業」から得ました。

文 献

- 土肥 守 (2011). 避難所Nursing Note ― 災害時看護心得帳. 大阪, メディカ出版, 79-83.
- 百田武司, 中信利恵子 (2011). 避難所疑似体験演習の効果と課題 参加者へのアンケート調査より. 日本赤十字広島看護大学紀要, 11, 1-9.
- 北村大樹 (2010). 災害対応能力向上のための図上訓練マニュアル (日本災害看護学会第12回年次大会プレ企画Ⅱ配付資料). 13.
- 名古屋市消防局 (2001). 災害図上訓練―マニュアル― (自主防災組織訓練編). 2011年11月3日, <http://www5.airnet.ne.jp/hukuta/dig/dig.pdf>
- 日本赤十字広島看護大学 (2011). 平成21～23年度大学教育・学生支援推進事業 大学支援推進プログラム もっと世界とクロスする救援ナースの育成 平成21・22年度中間報告書. 1-41.
- 楽木宏実 (2011). 災害時の高齢者医療. 血圧, 18 (8), 752-755.

Study of learning outcomes of “the practice for the simulated shelter experience”

– Comparison of students who have taken the international disaster relief nursing course and those who have not –

Takeshi HYAKUTA*, Rieko NAKANOBU*

Abstract:

Purpose : As part of the required courses, “the practice for the simulated shelter experience” was conducted overnight. It assumed that a tsunami warning had been issued following an earthquake and the shelter was placed at the gymnasium. In order to evaluate the learning outcomes of the practice, the understanding of the functions of a shelter and the purpose of the practice were compared between students who have taken the International Disaster Relief Nursing course and other students who have not.

Methods : Participants were given a questionnaire eliciting responses on a scale from 0 to 4 and the results for the two groups of students, those who have taken the International Disaster Relief Nursing course and those who have not, were compared (collection rate 100%) .

Results : On an item regarding the “role of nursing staff at a shelter,” students who have taken the International Disaster Relief Nursing course tended to have a better understanding than the other students. However, there was no statistical difference between the two groups with regard to other items.

Discussion : It seems that those who have not taken the International Disaster Relief Nursing course, by improving their readiness and motivation before the practice, can receive the same educational benefit from the practice as those who have taken the course.

Keywords:

Shelter, Practice, International Disaster Relief Nursing Course

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing